

「尋春不見春」詩偈流伝考

——増殖する「探春詩／悟道詩」——

土佐朋子

〔抄録〕

禅の悟道の精神を表した「名詩」として親しまれている七言絶句がある。第一句の「尋春不見春」と第四句の「已十分」の二か所を除いて、詩句が少しずつ異なる複数の本文が数多く存在するだけでなく、異なる複数の作者が存在し、異なる複数の詩題が付されている。作者も詩題も本文も、一体どれが本当なのか全くわからない。にも拘わらず、それらすべてが「名詩」としてもてはやされている。本稿では、日中の文献に記録された「尋春不見春」七言絶句をとりあげ、揺れ動く「作者」「詩題」「本文」の状況をまとめていく。その揺れは、この七言絶句が文字ではなく音声によって生み出され、口承の世界で流伝したものであることを

示している。北宋以降、梅花によって春の到来を知ったことを詠ずる七言絶句が生み出された。そして、それは、「拈華微笑」の成立と浸透、さらにその公案を春に先駆けて咲く「梅花」に重ね合わせて賛美する発想の登場とを背景として、禅の悟道の精神を表すものと解されて、広く巷間に浸透していった。その過程において、異なる本文と「作者」と「詩題」を生み出し、増殖しながら拡散したと推測される。

キーワード 悟道詩、探春詩、戴益、梅花尼、拈華微笑

一、「名詩」の謎

探春 戴益

A 終日尋春不見春 杖藜踏破幾重雲 歸來試把梅梢看 春在枝頭已十分

（終日春を尋ぬれど春を見ず 杖藜踏破す幾重の雲 歸り来て試みに梅梢を把つて看れば 春は枝頭に在つて已に十分）

右の七言絶句は、石川忠久『漢詩の楽しみ』（時事通信社、昭和五七年、以下「石川『楽』」）に宋代を代表する一首として紹介されている作品である。石川氏は、「杖藜」の語からこの詩の主体を「清貧の士」と想像し、「踏破幾重雲」の句に「人知れず奥深く分け入る」という行動をイメージし、「清貧の高士ゆえに、ふと見つけた春の趣」を表した一首だと解説している。

「戴益」の「探春詩」は、日本において「名詩」として広く一般に浸透し、親しまれた漢詩である。春に魁けて咲く梅を賞美する詩、ひいては真理（悟り）は身近なところに存すという禅の教えを表す詩として、石川『楽』以外にも、漢詩の紹介・解説を目的とした複数の書物や詩吟テキストに掲載されている。しかし、収録された本文を比較対照してみると、鎌田正・米山寅太郎編著『漢詩名句辞典』（大修館書店、昭和五五年）のように、「石川『楽』」と同一本文で掲出するものもある一方で、相違が確認されるものも少なからず見出される。

例えば、大正一〇年の大町桂月『和漢名詩詳解』（早稲田大学出版部）では、「禪語」を示す詩と解説し、

B 尽日尋春不見春 杖藜踏破幾重雲 歸來試把梅梢看 春在枝頭已十分

というように、冒頭の「終日」を「尽日」とする本文を掲げている。これと同じ本文を掲げるのが、詩吟テキストの吉村岳城『朗吟詩撰下巻』（日本藝道聯盟、昭和十一年、以下「吉村『詩吟』」）である。諸橋轍次『中国古典名言事典』（講談社、昭和四七年）、山田勝美『中国名詩鑑賞辞典』（角川書店、昭和五三年、以下「山田『鑑賞』」）、猪口篤志『中国歴代漢詩選』（右文書院、平成二十一年、以下「猪口『歴代』」）掲出の本文は次の通りであり、石川『楽』との相違はさらに大きくなる。

C 尽日尋春不見春 芒屨踏遍隴頭雲 歸來適過梅花下 春在枝頭已十分

冒頭「終日」が「尽日」になるのはBと同じである。第二句にはA「杖藜」に対してC「芒屨」、AB「踏破」に対してC「踏遍」、B「幾重」に対してC「隴頭」、第三句にはAB「試把」に対してC「適過」、AB「梅梢看」に対してC「梅花下」という相違がそれぞれ確認される。山田『鑑賞』は、「一本には、承句が『杖藜踏破幾重

雲（杖藜踏み破る幾重の雲）、また転句が『帰來試把梅花看』（帰來試みに梅花を把つて看れば）となつてゐる」と注しているが、「一本」が何を指すのかについては明らかにしていない。猪口『歴代』は、「二三句が、『杖藜（あかぎを杖ついで）踏破幾重雲。帰來試把梅梢見』となつてゐるものもある」と注し、『見』では韻が合わない」と指摘するが、依拠する資料を明らかにしていない。管見の範囲では、本詩を掲載する日中双方の資料において、第三句末を「見」とする本文は見出せない。

諸橋轍次編『大漢和辞典』には「芒輶」と「尋春」の項目に「戴益『探春』」が引用される。「芒輶」の項目ではCと同一本文が引用されるが、「尋春」の項目に引用されるのは「尽日尋春不見春、杖藜踏破幾重雲」であり、CではなくBと一致する。

同じ「戴益」という詩人の「探春」という題を持つ詩として挙げられながら、引用される本文が異なるというのはどういうことなのだろうか。語句一つ一つの違いは、その作品が描き出す具体的な世界のように微妙な影響を与える。

例えば、A Bが「幾重雲」とするのに対し、Cが「隴頭雲」というように具体的な地名を詠み込むという相違は小さくない。「隴頭」は今の陝西省と甘粛省にまたがる隴山のあたりを指し、寒冷な辺境の地というイメージを喚起する地名である。Cでは江南太守であった陸凱が、隴頭にいた范曄に、「梅を折りて駅使に逢ひ、寄せ与ふ隴頭の人に。江南に有る所無し、聊かに贈る一枝の春を」という詩を贈つたという典故が踏まえられている。陸凱は、温暖な江南で春の到来を告げ

る梅花を、寒さ故に春もなかなか訪れず、梅の生育にも適さない隴山の寒さの中にいる友人への贈り物としたのだろう。山田『鑑賞』では、「隴頭」を「梅花の異称」とし、「隴頭雲」を「雲のようにむらがり咲いている梅花」と解するが、むしろ逆で、梅花など見つけられるはずがないような、なかなか春が訪れない寒い所を象徴していると考えられる。

また、第三句では、主体の動作そのものが異なっており、違いが大きい。試みに梅の梢を手にとつて見るといふA Bでは、第二句目における幾重もの雲の中を放浪する姿と、手元に向けられた繊細な視線との対比が際立つ。それに対して、たまたま梅花の下を通り過ぎた時に、春が十分にあることに気づいたとするCでは、発見の偶然性が強調されることになる。

では一体、どの本文が「正しい」のだろうか。異なる本文であるにもかかわらず、同じ「戴益」なる詩人の、同じ詩題「探春」のもとに収録されているのは不可思議である。さらに「戴益」という詩人は、石川『楽』が「南宋の人。詳しい経歴などは伝わらない。この詩一首で名を残している詩人である」と注するのをはじめとして、右に挙げたいずれの書物にも「探春詩」のみを残す宋代ごろの詩人という以外には「不詳」とされる。そのような委細不詳の詩人の唯一伝来した詩が人口に膾炙し、その上、異なる複数の本文がすべて「名詩」としてもてはやされたというわけであるから、いよいよ謎である。

さらに、「戴益」とも「探春」とも示さずに、類似の詩を掲げる資料もある。明治二六年の粟津義圭『帳中五十座法談・巻懐五十座法

談』（仏教書院）では、「古人の詩」として、次の本文が引用されている。

D 尽日尋春不見春 芒鞋踏遍陋頭雲 归来忽擦梅花嗅 春在杖頭已十分

このDは、ABCいずれとも一致しない。

実はこの「名詩」は、中国の文献に広がっていくと、本文も詩人も詩題も異なるものが入り乱れ、複雑怪奇な様相を呈する。その一方で、第一句の「尋春不見春」と第四句の「已十分」という二か所に共通詩句を持つ七言絶句という構成には、全く揺れがない。このことから、それら多くの異なる七言絶句は全く無縁のものではなく、何かを「起点（オリジナル）」として、伝来の過程で異文が生じ、多様な類詩が併存することになったと考えられる。しかし、「起点」は誰によって、いつ、どのような本文で創作されたのか、その始原の形は全く以て不明と言わざるを得ない。

本稿では、宋代の文献から現代のネットに至るまでに引用された多様な類詩をとりあげ、これらの「尋春不見春」詩が増殖しながら拡散していくその流伝の状況を明らかにしてみたい。

二、別の作者名、別の詩題を掲げるもの

まず、「戴益」とは異なる作者を具体的に示し、「探春」とは異なる

詩題を付すものを挙げる。

(一) 作者「陳豊」、詩題「尋春」

清・陸心源『宋詩紀事補遺』（『統修四庫全書』）巻四一では、「陳豊」の項目に、「陳豊、舫齋と号し、仙遊の人なり。建炎一五年進士。侍郎謙の父、官は南恩守」という簡便な略歴を記し、「尋春」と題して次のEが収録され、『興化府志』に拠ったことが注記されている。

E 尽日尋春不見春 杖藜踏破幾山雲 归来試把梅花看 春在梅梢已十分

この本文は、Bに似ているが、「山」「花」「梅梢」にBとは異なる点がある。

清・鄭杰『閩詩録』（『統修四庫全書』）丙集巻七「陳豊」条にも、『宋詩紀事補遺』と全く同じく、「陳豊」の略歴、「尋春」の詩題、Eと同一の四句、「興化府志」の注記が見られる。

『全宋詩』巻二〇一三では、「陳豊」の項目に、「尋春」と題してEの本文を掲げ、明・陳効弘治『興化府志』巻三三に拠ったことを注している。『全宋詩』には陳豊（一一一〇～一一六五）の経歴が『宋詩紀事補遺』より少し詳しく記されており、それによれば、字「宜中」、号「舫齋」、仙遊（今の福建に属す）の人で、高宗紹興一八年（一一四八）に進士に挙げられて以降、泉州教授をはじめとして、一一六五年の死没まで様々な官職を歴任した人物である。呉承学氏は、陳豊の

ような無名とは言えない人物がこの詩を本当に作ったのであれば、宋元代の資料にその記載が全くないというのは不審だと指摘している。

(二) 作者「蔡襄」、詩題「鳳凰山尋春」

呉氏によれば、『蔡襄全集』補遺^②に、蔡襄の「鳳凰山尋春」と題した次の詩が収録されているという。

F 尽日尋春不見春 杖藜踏破幾山雲 帰来試把梅花看 春在梅花已十分

呉氏は、現存する蔡襄集宋明刻本には当該詩は収録されておらず、蔣維鏞『蔡襄年譜』では「偽作」とされているとしている。

蔡襄^③(一〇一二～一〇六七)は、陳豊より一世紀ほど前の北宋の官人であり、詩と書に優れていた。陳豊と同じく、興化軍仙游の人である。

(三) 作者「張元」、詩題「探春」

明・洪梗『清平山堂話本』(『続修四庫全書』)の『洛陽三怪記』の入話の部分に、

G 尽日尋春不見春 杖梨槩破嶺頭雲 帰来点檢梅梢看 春在枝头已十分

を置き、「這四句探春詩是張元所作」と記す。本文は、「梨」「槩」「嶺」「点檢」がA～Fのいずれとも異なっているが、バリエーションの一つと考えられる範疇ではある。呉氏によれば、宋代に「張元」なる人物はいたらしい。華州の士人だったとされる。

『清平山堂話本』に収録されていることは、宋代以降に流行する講談で引用されたということになる。Gが宋代以降、巷間に広く浸透していたことが窺われるが、なにゆえこの詩の作者が「張元」にされたのかは全く不明である。

これらEFGの本文は、戴益「探春」とされるA～Cと似ている。語句一つ一つには違いがあるが、詩句の構成は同じであり、伝来・拡散する過程で生じた異文の関係と見るのが自然である。にもかかわらず、全く異なる作者名と詩題が付されている。張元、陳豊、蔡襄は宋代に実在した人物とされている。そのような実在の人物の作だとされるには、どのような経緯と背景があつたのだろうか。今は失われているが、なにか、これらの人物を語る逸話か何かがあつて、そのある場面でこの詩がその人物の台詞として用いられた、などの経緯を想像したくなる。

三、「帰来偶過梅花下」と袁枚『随園詩話』

清・袁枚『随園詩話』^④では、「宋代の絶句」だとされているのみで、詩人名や詩題は付されていない。

乃傲王漁洋『池北偶談』採宋絶句之例以補之。其題、其作者姓名俱不省記也。其詩云、「日鎮日尋春不見春、芒鞋踏遍隴頭雲、帰来偶過梅花下、春在枝頭已十分」。

第三句を「偶過梅花下」とする文献は管見の範囲では見当たらない。C「適過梅花下」が最も近い。袁枚は、「宋絶句」として掲げてはいるが、その出所については特に述べていない。作者名や詩題も「記すを省かず」としていながら、記されていない。

四、『聯珠詩格』と戴益「探春」

中国の文献で、戴益「探春」という作者名と詩題を付すものが一つだけある。『聯珠詩格』（文化元年「一八〇四」刊）巻八の「用帰来字格」に次のように収録されている。

探春 戴益
終日尋春不見春 杖藜踏破幾重雲 帰来試把梅梢看 春在枝頭已十分

この本文はAと全く同一である。

『聯珠詩格』は、唐宋代の詩人たちの美しい詩（「聯珠」）を選び、詩の表現の形式（「詩格」）によって分類し配列した詞華集であり、『唐宋千家聯珠詩格』などとも呼称される。于済が原撰した三巻に、

蔡正孫が増補して二〇巻本として、元大徳四年（一三〇〇）に刊行された。しかし、大陸では刊行後ほどなく散逸した。揖斐高氏は、大陸で散逸した理由について、元に従った人士の詩を除外したためとする山本北山説、選詩の杜撰さゆえとする佐藤一斎説を紹介し、『聯珠詩格』は、その選詩に「変化に乏しく、個々の詩も佳作ばかりとは言えず、校定の杜撰さが感じられる部分」が見られ、「選詩集としては必ずしも一流のものではなかった」と論じ、一斎説を支持している。

だが一方、日本では年少者のテキストに適したことから『聯珠詩格』は積極的に受け入れられ、室町から江戸期にわたって複数回刊行されて広く流行した。江戸中期になると、一時的に『唐詩選』の流行に押されたこともあったが、山本北山や市河寛齋らによる宋詩風の提唱によって、宋詩を多く収録する『聯珠詩格』が再びもてはやされるようになった。文化元年（一八〇四）に大窪詩仏が『聯珠詩格』二〇巻五冊を刊行し、天保二年（一八三一）に貫名海屋が、大窪版で削除された李朝の徐居正増注を復活させて『増注聯珠詩格』二〇巻一〇冊を刊行した。また、享和元年（一八〇一）には柏木如亭が『訳注聯珠詩格』を刊行しているが、巻一〜巻四の七言絶句からの抄出であるため、巻八所収の戴益「探春詩」は掲載されていない。如亭は、如亭が信州中野に開いた詩社である晚晴吟社で詩作を講義した際に、『聯珠詩格』をテキストに用いて、そこに収録された詩一首一首に対して俗語を用いて「訳注」を施した。『訳注聯珠詩格』はその内容がまとめられたものである。

『聯珠詩格』は詩作テキストとして五山僧に活用された。貞享五年

(二六八八) 刊已十子編『増補首書 禅林句集 出所付』を底本とする足立大進編『禅林句集』(岩波文庫、平成二二年)には、「春在枝頭已十分」が抄出され、出典は「聯珠八」と記されている。

田島照久氏²⁷によれば、「已十子」は、黄檗宗の僧侶だったと見られる毛利貞斎の号であり、戴益「探春詩」の「已十分」に由来するといふ。いかに戴益「探春詩」が禅宗関係者に親しまれていたかが窺われる。

田島氏は、臨済宗の禅僧寂室元光(一二九〇～一三六七)『永源寂室和尚語録』巻一(大蔵経八一巻二五六四則b)に収録された偈頌「示僧二首」にも、「風和日暖黄鸝囀 春在花梢已十分」という「春在枝頭已十分」と類似の句を持つ一首があることを指摘している。この禅僧の偈頌では「花梢」となっていると異なっている。今のところ、E「梅梢」が最も近く、管見ではこの箇所を「花梢」とする本文は見出せない。寂室元光が見聞した本文にそのようになっていたものがあって借用したのか、あるいは独自に改変したのかは判然としない。また、この禅僧が、この一句を『聯珠詩格』所載の戴益「探春詩」の一部として認識していたのか、それともこの一句を「禪語」として理解していたのか、そのあたりもよく分からない。

しかし、いづれにしても、『聯珠詩格』は選詩や本文に粗雑さを抱えながらも、日本では幼少者向けの入門テキストとして歓迎され、五山僧の間でも詩作テキストとして用いられ、江戸期には相当に流布したことがうかがわれる。

いわゆる戴益「探春詩」もまた、『聯珠詩格』を介して日本に流布

した可能性が高い。とりわけ禅僧の間での浸透は深く、その詩句が「禪語」として認定されることにもなったと見られる。

しかし一方で、大陸には、この四句あるいは類似句を戴益「探春詩」とする資料が『聯珠詩格』以外には見当たらない。『聯珠詩格』はいったい何に基づいてこれを戴益「探春詩」として掲載したのだろう。「戴益」という詩人の名は、この「探春詩」の作者としてしか伝わらず、他に伝記資料は見えない。前節で挙げた「陳豊」「蔡襄」「張元」は、実在した可能性が指摘されている。しかし、「戴益」という人物は、「探春詩」の作者としてのみかろうじて認知されるに止まるのであり、実在そのものが頗る疑わしい。

言われるように『聯珠詩格』の選詩や本文選定が杜撰であったとするならば、作者も詩題も不明のまま、詩句のみ存在していた四句に、作者「戴益」と詩題「探春」とを勝手に付して掲載した可能性も考えなくてはならない。「開元天宝遺事」には、正月半ば過ぎになると、郊外に出かけ「探春の宴」を開くという行事「探春」があったと記録される。この詩には「宴」に出かけたというような趣は看取されないが、「春を尋ねる」という詩句から「春を探す」行事が連想され、結びつけられたのだろうか。また、南宋の江湖派の詩人戴復古に「万斟寿酒 笑撚梅枝」という句を含む詞「行香子」があるが、それと混同されたか、あるいは連想が働いて、「戴益」なる詩人が適当にでっち上げられたという可能性はないだろうか。

このように憶測したくなるほどに、作者「戴益」と詩題「探春」は、『聯珠詩格』に至って唐突に現れる。日本では『聯珠詩格』という粗

雑な書が妙にもてはやされたために、「戴益」の「探春詩」が普及浸透し、「名詩」としての地位を確立していったと考えられる。しかし、近代以降の諸書においては、戴益「探春」という同じ作者名と詩題のもとで、複数の異なる本文が併存し、それら異文がすべて「名詩」と認定されるという奇妙な現象が起こっている。

大陸では、『聯珠詩格』が編纂後ほどなく逸亡していることもあり、後代に文献上で戴益「探春」として引き継がれた形跡は見当たらない。また『聯珠詩格』よりも前の文献においても、戴益「探春」は現れない。大陸では『聯珠詩格』の前にも後にも、複数の異なる本文と複数の異なる「作者」が入り乱れるという不可解な現象が確認される。その中で最も多く現れる「作者」が「尼」である。

五、「悟道尼偈」と「归来笑拈梅花嗅」

—公案「拈華微笑」と「梅花」—

大陸では、いろいろな「尼」が作者として登場するが、まずは「道を悟った尼」とされているものを挙げてみよう。明・曾鳳儀『首楞嚴經宗通』巻五における次の注釈である。

又尼有悟道者、偈曰、「I 終日尋春不見春、芒鞋踏遍隴頭雲、归来笑拈梅花嗅、春在枝頭已十分。」此尼与山谷所証亦以香嚴為上。

（続藏經一六卷三一八35b）

これは、「何によって円通に入ったか」という釈尊の問いかけに答えた香嚴童子の言葉、「我如来の我に教へて、諦に諸の有為の相を觀ぜしめたまふを聞きて、我時に仏を辭し、晦き清齋に宴して、諸の比丘の沈水香を焼くを見しに、香氣寂然として、来つて鼻中に入る。我此の氣を觀ずるに、木に非ず、空に非ず、煙にも非ず、去るに著くる所なく、来るに従ふ所なし。是に因りて意銷し、無漏を發明す。如来我を印して、香嚴の号を得しめたまへ。塵氣倏ちに滅して、妙香密円なり。我、香嚴に従つて阿羅漢を得たり。仏、円通を問ひたまふ。我が所証の如きは、香嚴を上と為す」（巻五）に対して、明代の曾鳳儀が施した注釈である。

この『首楞嚴經』は正式名称を『大仏頂如来密因修証了義諸菩薩万行首楞嚴經』といい、八世紀初頭に中国で撰述されたのではないかと推定されている。後世に至り、特に禪宗で尊重され、さかんに用いられた。この曾鳳儀の注釈では、香氣によって円通したという香嚴童子の言葉に対して、「道を悟った尼」の偈としてこの四句が掲げられている。

この偈では、遠方へ探しに行ったが見つけれなかった春を、身近な所にあつた梅の香りによって発見できたことが述べられている。「春」が「悟り」の比喻になっており、尼が梅の「香り」によって道を悟ったという点が、香嚴童子と共通しているということであろう。ちなみに、この尼の偈の前には、黃庭堅が木犀の「香り」によって悟るに至つたという逸話が注記されている。この注釈末尾が、「此の尼と山谷との所証も亦た香嚴を以て上と為す」と締めくくられているの

はそのためである。

第四句の「笑拈梅花嗅」は、AとHにはなかった新たな要素であり、Iの特色と言える。Dとは「嗅」は共通しているが、Iの「笑拈」という動作がDでは「忽燃」となっているところが異なる。

Iの「笑」からは、いくら探しても見つけられなかった「春」のしるしである。「梅花」を、やっと思つたという尼の喜びが伝わってくる。この喜びは、「隴頭」の語が象徴する、梅花があるはずのない所を探していたことに気づいた自嘲を含むものかもしれない。そして、その「梅花」を指先で「拈」り、香りを「嗅」いで、確かに春が十分に來ていたことを知ったとする。「隴頭」のような遙か彼方の外界ではなく、身近に咲いていた「梅花」の「香り」に、「春」という悟りの境地を見出したという偈である。

I「拈」とD「燃」は、似ているが異なる動作を表す。「拈」は『説文』(手部)に「拈、撮也」、『広韻』(添韻)に「拈、指取物也」などとされ、「指でつまむ動作」をいう。「燃」は、『説文解字』(手部)に「燃、執也」、『広韻』(銃韻)に「燃、以指燃物」、『一切経音義』卷一九に「以二指一去一來相搓曰燃」などあり、「手で執る、あるいは指でよじる動作」をいう。語義はよく似ているが、完全に同じではない。「拈」はあまり力を入れず指先で軽くつまむような動きであり、「燃」は「拈」より力を入れ、手でとりあげたり指でよじったりする動きである。

施麗瓊氏は、「燃」だと接触面が大きく、力を入れた動作になるのに対して、「拈」は「笑」と接続して軽声で読まれることになり、人

から聞かずとも自ずから悟った尼の心が表されると同時に、梅花を見て喜びを禁じ得ず、指先で花弁を散らさないような気をつけ、軽く花をつまむ尼の仕草の繊細さが表現されると指摘している。「拈」の方が、禅の悟りの境地をより表し得るということだろう。

また、施氏は、「拈」には禅の公案「拈華微笑」を典拠とする意識が看取されることを指摘している。「拈華微笑」では、釈尊が「蓮華」を「拈」って示した「悟り」を、摩訶迦葉のみが理解して「破顔微笑」する。「帰來笑拈梅花嗅」では、尼が「梅花」という「春」(悟り)を見つけて「笑」って「拈」じ、その香りに「春」(悟り)が存在したことを確認する。「拈華微笑」が、釈尊と摩訶迦葉という二人の間に成立した以心伝心の悟りの伝授であるのに対して、尼の詩偈では尼一人の中で起こった悟りの発見という違いはある。しかし、文字などを介してではなく、釈尊の「拈華」、あるいはほころぶ「梅花」を見て、自身の中で自ずから悟りに達するという、悟りへの到達の道筋は同じである。その道筋において鍵となる「笑」「拈」の動作が共通していることも注目される。「笑拈梅花嗅」が、禅において悟法を表した公案として重視される「拈華微笑」を意識したものである蓋然性は高い。

釈尊が「拈」るのは「蓮華」であり、悟道の尼が「拈」るのは「梅花」で異なる。しかし「拈華微笑」と「梅花」を関連づける発想は、他にも禅僧の頌に見ることができる。元成宗大徳一年(一一三〇七)成立の『禅林類聚』卷一九に収録される佛慧泉の頌では、「拈華微笑」における悟りの境地が、誰も春の兆しに気づかない寒さの中で唯一ほ

ころぶ「梅花」の姿で比喩的に賛美される。

霜風括地掃枯菱 誰覚東君令已回 唯有嶺梅先漏泄 一枝独向雪中開
（続藏経六七卷一二九九115c）

これに対して、萬安英種『禪林類聚撮要抄』（寛永一九年刊）は、「霜風の地を括り枯菱を掃ふ時分に、はや東君の令が已に回るなり。東君の令の回たる支証には、嶺頭の梅が先づ春色を漏して雪中に一枝開いたなり。言は、世尊の括処は霜風とて暖気は無きなり。迦葉の微笑の処で春色が漏れたなり」と注している。

前半二句は、冷たい霜風が枯れ草を払って吹く中では、本当はそこに含まれているはずの春に誰も気づかないという。これが釈尊の「拈華」に対して誰も反応しなかったという公案前半にあたる。第三句の「漏泄」は梅の香りが漏れ漂ってくることを言うのだろう。この頌では、霜風の中で唯一芳しい香りを漂わせ、独りで雪の中で「ほころび」を見せる梅の姿と、釈尊の拈華を見て唯一「微笑」した摩訶迦葉の姿とが重ね合わされている。

禅宗の悟りの真髓を表す公案として重視される「拈華微笑」に対して、摩訶迦葉の「微笑」に象徴される「悟り」を、梅花の「ほころび」に象徴される春の到来に重ね合わせて賛美する意識が見られることは注目される。この佛慧泉の頌がいつ出来たのかは不明だが、元代成立の『禪林類聚』に収録されているということは、それ以前にすでに存在したことは間違いない。この頌が成立するためには、梅花を春

の到来の象徴とする発想や表現が、広く普及浸透し、共有されていることが必要である。それは宋代以降だとされる。「拈華微笑」の公案の成立も北宋ごろと考えられている¹¹。ということは、宋代以降元代前半までには、「拈華微笑」が描く悟りの伝法を、たったひとり自ずから春に気づいてほころぶ梅花に重ね合わせる発想が成立したことになる。

この発想が媒介となつて、梅花を見つけて悟りを得たという尼の偈が、「拈華微笑」に象徴される禅宗の悟りの精神に結びつけられていったのではないだろうか。その過程で「笑拈梅花嗅」という禅宗の趣の濃い句が作られることになったのではないかと考えられる。

六、さまざまな「尼」の「禪詩」

「尼」の四句は現代でも日中双方において、「禪詩」としてしばしば紹介される。それらの本文は揺れ動くが、「梅花」を「嗅ぐ」という動作を描き、梅の「香り」で春の到来に気づいたとする点においては共通している。

小田美和子氏が「禪詩集」に必ず採られる作品として紹介する「某尼」の「悟道詩」は、「J 尽日尋春不見春 芒鞋踏遍隴頭雲 帰来笑拈梅花嗅 春在枝头已十分」である。

王洪・方広錫編『中国禅詩鑑賞辞典』（中国人民大学出版社、一九九二年）にも、姚徳彬氏執筆「某尼」の項目に、生年も出身地も不明の「某尼」の「悟道詩」として、Jの本文で紹介されている。姚徳彬

氏は羅大経『鶴林玉露』が出典だとしているが、次節で紹介するように、このJは『鶴林玉露』の引用本文とは異なっている。

さらに、中国のサイトでも、大同小異の本文で「尼」の「禪詩」として大いにもてはやされている。例えば、「大紀天文化網」のサイトの「神伝文化」欄では、「尽日尋春不見春 芒鞋踏破隴頭雲 帰来笑拈梅花嗅 春在枝頭已十分」の本文で、「宋代の比丘尼」の詩として紹介している。これは、文逸飛『独釣寒江雪―經典名作中的秘密』

(文津出版)に依拠した紹介のようであるが、このサイトでは、比丘尼は草鞋が破れるほど仏法を探し求めたが見つけられず、追求を放棄して故郷に戻ったところ、忽然として美しい春光の中に枝上の梅花を見つけ、一瞬にして仏法を悟り、自らの悟道の証拠として書き記したものと説明を施している。

また、「毎日頭条」というサイトでは、たびたび禪の悟りの境地を表す尼の詩偈として紹介されるが、本文が一定しないばかりか、「尼」の呼称も様々であり、中には題を付すものもある。一部を掲出してみよう。サイト内の共通部分に網掛けを施す。

作者「某比丘尼」、詩題「嗅梅」

尽日尋春不見春 芒鞋踏遍隴頭雲 帰来笑拈梅花嗅 春

在枝頭已十分

(「禪詩賞析・帰来笑拈梅花嗅 春在枝頭已十分」二〇

一八年一月一八日由無功用行發表于佛教)

作者「唐代比丘尼」、詩題「尋春」

尽日尋春不見春 芒鞋踏遍隴頭雲 帰来笑拈梅花嗅 春
在枝頭已十分

(「這首尋春禪詩、看似平淡無奇、却寫出人生修行開悟的心理過程」二〇一八年二月二八日由江徐的自留地發表于佛教)

作者「唐無尽蔵」

終日尋春不見春 芒鞋踏破隴頭雲 帰来偶把梅花嗅 春

在枝頭已十分

(「終日尋春不見春、芒鞋踏破隴頭雲」二〇一六年一月三日由古風君發表于新聞)

作者「唐朝無尽蔵比丘尼」
尽日尋春不見春 芒鞋踏破隴頭雲 帰来笑拈梅花嗅 春

到枝頭已十分

(「一首禪詩的小悟」二〇一八年九月四日由春風雲水發表于美文)

作者「唐朝無尽蔵」、詩題「嗅梅」

終日尋春不見春 芒鞋踏破隴頭雲 帰来偶把梅花嗅 春

在枝頭已十分

(「与其疲于尋覓、不如清心參悟」二〇一七年一月二日由文化劍客發表于新聞)

作者「無尽蔵尼」

尽日尋春不見春 芒鞋踏破隴頭雲 帰来偶把梅花嗅 春

在枝頭已十分

〔「読禪詩、讓你浮躁的心静下来」二〇一七年四月一六
日由西園落木發表于文化〕

特有の現象と言える。

このほかに、作者や題には言及せず、『鶴林玉露』を出典として、
「**尽日尋春不見春**」**芒鞋踏破嶺頭雲**」**歸來笑拈梅花嗅**」**春在
枝頭已十分**」を掲げるページ（「近日尋春不見春、芒鞋踏破嶺頭雲」
二〇一七年一月一八日由樹林里的種子發表于美文）もあるが、次

「**梅花**」と「**無尽蔵**」は関わりが深い。陸游「看梅帰馬上戯作」に
「**要識梅花無尽蔵** 人人襟袖帶香帰」（『劍南詩稿』卷九）とあり、そ
れに影響を受けた室町中期の禅僧・万里集九が自らの詩文集に『**梅花
無尽蔵**』と名付けている。ネットの「**無尽蔵尼**」という呼称は、詩偈
第三句の「**梅花**」から連想され編み出された可能性が考えられる。

節で紹介するように『鶴林玉露』の引用本文とは異なる。また、「七
葉佛教書舎」のサイト¹⁵では、星雲法師『星雲説偈1 千江映月』（佛光
出版社）に、「**唐無尽蔵比丘尼**」の詩偈として「**終日尋春不見春
芒鞋踏破嶺頭雲**」**歸來偶把梅花嗅**」**春在枝頭已十分**」が引用さ
れることを紹介し、ネットから転載されたものだとしている。

さらに、禅宗の第六祖慧能（六三八〜七一三）の伝に、「**無尽蔵**」
と呼ばれる尼が現れる。『宋高僧伝』『景德伝燈録』など複数の文献に
記録される伝によれば、慧能が交友を結んだ劉志略の姑に「**尼無尽
蔵**」がいた。尼無尽蔵は常に涅槃經を誦んでいた。慧能はそれを聴き、
尼のために涅槃經の義を解説した。尼が慧能に經典を見せて文字を問
うたところ、慧能は文字を識らないと答えた。尼が文字を知らないの
になぜ經の義が分かるのかと問うと、慧能は、文字に関わればそれは
仏意ではない、諸仏の理は文字に関わるに非ざるなり、と答えた。尼
はそれを聞いて深く歎服したという。

これらネットの引用においては、少しずつ本文が揺れているが、逆
に網掛けの部分は揺れないという特色も指摘できる。「**尼**」が「**芒鞋**」
で遠方へ春を「**尋**」ねて出かけたが発見できず、帰ってきて「**梅花**」
を「**嗅**」いで、春の発見に至ったという経緯には、揺れが生じていな
い。気まぐれのように付される「**尋春**」「**嗅梅**」という題は、いかにも
これら共通性の高い詩句から案出されたものようである。

本文は一定せず、詩題はあつたりなかつたりだが、作者を「**尼**」と
する点だけは共通している。唐の尼とされたり、宋の尼とされたりす
るが、特にこれらのサイトで目立つのは「**無尽蔵**」という尼の名称で
ある。文献上では、作者を「**無尽蔵尼**」とするものは管見の範囲では
見当たらない。尼に「**無尽蔵**」という呼称を与えているのは、ネット

この逸話は、「拈華微笑」の公案と同様、「**不立文字、教外別伝**」と
いう禅の悟りの真髄を表したものとされる。ここに「**無尽蔵**」という
尼が関与してくるのは注目される。「**梅花**」と「**無尽蔵**」、「**無尽蔵**」
と「**禅の悟り**」いう連想が働いても不思議ではない。「**梅花**」の香り
によって悟りの境地に至った「**尼**」と、禅の悟りの真髄を慧能に語ら
せた「**無尽蔵尼**」とが、「**悟り**」という共通項によって半ば同一視さ
れていくような現象が生まれたのではないかと推量される。

七、「尼」の「悟道詩」―「归来笑煞梅花嗅」―

この句を尼が道を悟った詩あるいは偈とする資料は、禅関係にとどまらない。南宋・羅大経（一一九六―一二五二）『鶴林玉露』（宋淳祐八〔一二四八〕序・四庫全書）巻一八には、「道不遠人」の項目に次のように記される。

子曰、「道不遠人。」孟子曰、「道在邇而求諸遠。」有尼悟道詩云、「K 尽日尋春不見春、芒屨踏遍隴頭雲、归来笑煞梅花嗅、春在枝頭已十分。」亦脱灑可喜。

「道は人に遠からず」を表す言説として、孔子や孟子と並べて、尼の「悟道詩」が引用されている。南宋以前にすでにこのKが尼の「悟道詩」として存在していたことになるが、羅大経はその出典を記していない。

呉氏が、「有尼悟道詩云」という記述は、「悟道詩」を詩題として示しているのではなく、「悟道の詩」というように「悟道」は詩の主題を示すものではないかと指摘している。しかし慶安元年（一六四八）刊の版本では、「尼悟道詩と云もの有り」と訓読されており、また呉氏が参照した王瑞来点校『鶴林玉露』では王氏が「有尼『悟道詩』云」と符号を付しているとのことであるから、「悟道詩」を詩題として捉えるのが一般的と見られる。

このKも、これまで挙げてきた「尼」の「禅詩」として引用された

句と同様、「梅花」を「嗅」ぐ尼の動作を描く。『鶴林玉露』では、自らの近くに「道」があることを表す名言として、孔子や孟子の言と併記されており、特に禅の悟りの精神を説明するための句として引用されているわけではないと見られる。「春」（悟り）は、「隴頭」という遠き所ではなく、身近な所に咲く「梅花」に宿っていたというので、「道は人に遠からず」を表す詩として挙げられたのだろう。

明清代の詞華集などでは、しばしば『鶴林玉露』と同じように、「尼」の「悟道」の「詩」（あるいは「偈」として掲載されるが、詩句が『鶴林玉露』と異なる箇所も確認される。

a 明・陳全之『蓬窓日録』（統修四庫全書）巻七「詩談」

「尽日尋春不見春 芒屨踏遍隴頭雲 归来笑煞梅花嗅 春在枝頭已十分。」此尼詩也。脱洒可喜悟道之言也。

b 明・鹿善繼『四書説約』（四庫全書存目叢書）の『中庸』巻二「有尼悟道偈云、「尽日尋春不見春 芒鞋踏遍隴頭雲 归来試拈梅花嗅 春在枝頭已十分。」字字堪味。

c 明・葉廷秀『詩譚』（四庫全書存目叢書）巻八「春在枝頭」有尼悟道詩、「尽日尋春不見春 芒屨踏遍隴頭雲 归来笑煞梅花嗅 春在枝頭已十分」。

d 清・張貴勝『遺愁集』（統修四庫全書）巻一一「警悟」昔一尼悟道作詩云、「尽日尋春不見春 芒屨踏遍隴頭雲 归来笑煞梅花嗅 春在枝頭已十分」。

e 清・褚人穫『堅瓠集』（統修四庫全書）乙集卷三「尼悟道」

子曰、「道不遠人」、孟子曰、「道在邇而求諸遠」、有尼悟道詩

云、「尽日尋春不見春 芒鞋踏破隴頭雲 归来笑撚梅花嗅

春在枝頭已十分」。

f 清・李清『歴代不知姓名録』¹⁷ 卷八「悟道尼」

有尼悟道作詩云、「尽日尋春不見春 芒鞋踏遍隴頭雲 归来

笑撚梅花嗅 春在枝頭已十分。」宋鶴林玉露

a、f は『鶴林玉露』に基づいている可能性が高いと思われるが、

『鶴林玉露』と全く同一の本文を引用するものは a、c、d だけであり、

あとは少しずつ異なっている。f は、末尾に「宋鶴林玉露」に基づいたことを注記しておきながら、『鶴林玉露』では「嗅」とされる第三

句末を「嘆」とする。ここを「嘆」とするものは、管見の範囲ではほ

かには見当たらない。e は、孔子と孟子の言と並列されており、『鶴林玉露』と同じ構成をとり、明らかに『鶴林玉露』をそのまま引用し

ながら、『鶴林玉露』が「遍」とする第二句四字目を「破」とする。

「踏遍」を「踏破」をする本文は他にもあるが、「隴頭雲」と連結する本文は、今のところ他に見出せない。「踏破」とする本文では、「嶺

頭雲」あるいは「幾重雲」「幾山雲」「曉山雲」が後に続く。b は、

『鶴林玉露』が「笑撚」とする第三句を「試拈」としている。「拈」とするのは曾鳳儀が引用する I であり、「悟道詩」ではなく「悟道偈」

とする点からも一見、曾鳳儀注釈に近いように思われる。しかし、I

では「笑拈」であり、「試拈」とはなっていない。管見の範囲では、「試拈」とするのはこの b だけであり、「試」字を採る本文では「把」

が接続されている。

また、次に挙げる明・江盈科『雪涛閣詩評』¹⁸ 卷二では、「尼僧」の詩として掲げ、「悟りし後の人の語に似る」とされている。

一尼僧題一詩云、「L 到处尋春不見春 芒鞋踏破曉山雲 归来笑

撚梅花嗅 春在枝頭已十分。」絶似悟後人語。

L は、冒頭が「到处」、第二句「曉山雲」とするところが、これま

でに見てきたもののいずれとも異なる。冒頭「到处」は後に挙げる

『懷古録』に見られるが、第二句「曉山雲」は今のところ他には見当たらない。この『雪涛閣詩評』に依拠することを明記して引用するの

が、清・趙吉士『寄園寄所寄』¹⁹ 卷上「撚鬚寄・詩話」、および清・趙

翼『甌北詩話』²⁰ 卷一一「詩人佳句」である。『寄園寄所寄』では確かに「一尼僧」から「人語」まで、『雪涛閣詩評』の記述がそのまま引き写されている。しかし、『甌北詩話』では、引用本文に違いがあり、

第二句が「芒屨踏遍嶺頭雲」とされており、L と同一ではない。

明・劉万春『守官漫録』（四庫禁燬書叢刊）卷五「外編見聞隨筆」では、L と同一本文を引用し、「絶似悟後人語」の評も『雪涛閣詩評』

と同一である。しかし、作者を「尼僧」ではなく「僧」だとしている。

また、「悟道」よりも「梅花」に注目して、「詠梅花尼」と呼称するものもある。

明・田藝衡『詩女史』（四庫全書存目叢書）卷一一

詠梅花尼

元時一尼詠梅花云、「M 終日尋春不見春 芒鞋踏破嶺頭雲 歸
來笑撚梅花嗅 春在枝頭已十分。」蓋悟真之言也。後果得道。

さらに、尼の名を「梅花尼」とするものさえある。

明・鍾惺『名媛詩歸』（四庫全書存目叢書）卷二三「元」

梅花尼 不知姓氏、但有詠梅花詩、時皆稱善、為梅花尼

終日尋春不知春 芒鞋踏破嶺頭雲 歸來笑撚梅花嗅 春在枝頭
已十分 在枝頭尋春實境

ここでは、Mと同じ本文が引用されている。Mに描かれる「梅花」を「嗅」ぐという尼の動作は、作者を「尼」とする他の文献と共通している。しかし、「元代」の尼とする点については、他の文献にはなかった新たな要素である。

また、清・王初桐『奩史』（続修四庫全書）卷六一「術業門・三姑六婆」所引『紅蕉集』には、

元時一尼不知姓氏。因詠梅花 時稱「梅花尼」云、「N 終日尋春
不見春 芒鞋踏破嶺頭雲 歸來笑撚梅花嗅 春在枝頭已十分」。

と記され、波線部に『名媛詩歸』と似た説明がなされるが、引用本文

Nは冒頭を「尽日」としており、Mとは異なる。

さらに、清・陳焯撰『宋元詩会』（四庫全書）卷一〇〇では卷末の付録に、作者「見梅花尼」、詩題「詠梅花」として、さらに清・張豫章撰『御選宋金元明四朝詩 御選元詩』（四庫全書）卷七九では、作者名「梅花尼」、詩題「詠梅花」として、それぞれMと同一の本文を収録している。両詞華集とも、「梅花尼」の「詠梅花詩」を「元代」に区分している。

これら「尼」を「梅花」と強く結びつけて呼称する資料においては、本文には少し揺れが見られるが、いずれも「元代」の「尼」とする点では一致しているのが、特徴的である。

そして、この「梅花尼」の名を「習静」とする文献もある。清・宋長白『柳亭詩話』（四庫全書存目叢書）卷二五「春婦春在」条では、「梅花尼」の名を「習静」と注記する。

春婦春在 梅花尼名習静

梅花尼子、行脚婦有詩曰、「O 着意尋春不見春 芒鞋踏破嶺頭雲
歸來笑撚梅花嗅 春在枝頭已十分。」二絶可謂得禅機三昧矣。

Oは「着意」とする点が、Mと異なる。管見の範囲では「着意」とする文献は他に見当たらない。「二絶」とされるのは、この詩話において白居易の詩文と並列されているためであり、ともに、禅の思想と結びつけられている。

これら禅宗とは必ずしも関係ない文献に、「尼」の詩として引用さ

れる場合、本文にはバリエーションがある。ただ、第三句目「帰来」の後を「笑撚梅花嗅」とする点は、「試拈」（第七節b）とする例外も見られるが、ほぼ共通していることも指摘できる。

八、「古人風月」——蘭谿の語録——

逆に、禅関係の文献ではあるが、尼とも僧とも関係なく、先人の詩として引用するものもある。宋・蘭谿道隆『大覚禅師語録』巻上に次のように記されている。

蘭谿今日借古人風月、為諸人剖露去也、「P 終日尋春不見春、芒鞋踏破幾重雲、帰来細把梅花看、春在枝頭已十分」。

（大蔵経八〇巻二五四七59c）

第三句「細」は、今のところこれ以外には見当たらない。

蘭谿は、楊万里（開禧二年「一一〇六」）や陸游（嘉定三「一一二一〇」）が没してすぐの南宋嘉定六年（一一二三）に生まれ、寛元四年（一二四六）に來日し、鎌倉五山の一つ建長寺の開山となり、弘安元年（一二七八）に没した禅僧である。ここでは、蘭谿が、臨済の悟りを衆人に説くために用いた「古人風月」として引用されている。蘭谿はPを「先人の詩」と認識していたことになるが、作者も詩題も示されていない。本文は、これまで挙げてきたものとはまた異なる形になっている。

汴東波氏^②は、この詩は、仏は人から遠くない、近くに存することを言っており、当時禅宗で「悟道」を示す詩としてよく用いられていたのではないかと推測している。また、呉氏は、「風月」は宋人が詩文を指すのに用いる語であり、流行詩を用いて「仏理」を説くのは禅林の慣例だと言う。それらに基づけば、南宋の頃までに、この詩が巷間に流布していたということになる。

九、「春在枝頭已十分」唐代成立説

第四句の「春在枝頭已十分」は、ほとんど揺れがない句である。この第四句のみ、唐代の詩句として引用される例も見られる。

元・郭豫亨撰『梅花字字香』（四庫全書）後集に「春在枝頭已十分」が、八人の詩句を一つずつつなげる集句詩の第一句目に、「王建」の句として置かれている。王建は、七七五年進士で、『唐詩選』に「十五夜望月」が選ばれている中唐の詩人である。呉氏によれば、現存する王建の詩には「春在枝頭已十分」を含む詩は見当たらないという。『江湖小集』（四庫全書）巻二〇所収の李紳『梅花衲』にも、集句詩の第四句に「春在枝頭已十分」が置かれるが、作者は「唐人」とするに止まる。

一〇、逸話集など

その他、清『石渠宝笈』（四庫全書）巻二二「集古図絵一冊」には

「王涑隸書題云」として、Mとほぼ同じ本文を収録するが、第三句を「帰来嘯応作笑撚梅花嗅」としており、第三字を「嘯」を本文に採り「笑」に作るべきだという注記を施す点が異なる。

南宋・陳模撰『懷古録』²²巻中に、王某という江西詩客が、秦檜の問いかけに対して、「Q 到处尋春不見春 枝頭劈破幾重雲 帰来檢点梅花樹 春色梢頭已十分」という詩を書して答えたという逸話がある。

本文は、「到处」はしとのみ一致し、「枝頭劈破」「春色梢頭」はこれまで挙げたいずれの本文にも見られず、独自性が高い。汴氏は、本句の「作者」を「江西詩客王某」と解している。それに對して、吳氏は秦檜の問いかけが金昌緒「春怨」を引用してのものであることから、王某もまた先人の詩を引用したまでであり、王某が作ったわけではないと論じている。いずれにしても、『懷古録』は南宋成立であるから、それまでにこのような詩が存在していたということになる。

また、明・毛晋『二家宮詞』（四庫全書）巻下「宋・楊太后」条には、「R 日日尋春不見春 弓鞋踏破小除芸 棚頭宣入紅粧隊 春在金樽已十分」が引用される。この宋代の楊太后のものとされる四句は、これまで挙げてきた本文と大きく異なり、やや戯画的でもある。楊太后本人あるいは第三者が楊太后のものとして作った意図的なパロディである可能性が考えられる。

一、口承の果て

日本では「名詩」として普及浸透している戴益「探春詩」ではある

が、中国の資料においては複数の作者、詩題、本文が無秩序に入り乱れ、乱雑無章の状態を呈している。今や本郷であるはずの中国では、「戴益「探春詩」という作品の存在など、ほとんど認知されていないのではないだろうか。

戴益「探春詩」を記載する最も早く、かつ唯一の文献は、元代の『聯珠詩格』である。『聯珠詩格』以外には、その以前にも以後にも一切、戴益「探春詩」という作品は現れない。日本での普及浸透の仕方とは対照的である。大陸ではほとんど顧みられなかった『聯珠詩格』が、日本では詩作テキストとして重宝されたことが大きい。そのため、戴益「探春詩」は詩作の文本として受容されることになった。『聯珠詩格』を積極的に学んだ禅僧たちの間で、禅の心を表す詩としてもはやされ、戴益「探春詩」は日本において、高尚な精神を表した漢詩の文本として定着していくことになったと推測される。さらに昭和期以降には、詩吟テキストにも掲載され、吟詠の定番となったことにより、広く一般に普及浸透し、戴益「探春詩」は「名詩」として一人歩きを始め、知名度をあげていくことになる。

この四句を収録する文献は、南宋時代のものが最も古い。その一つが『鶴林玉露』である。ここでは、尼の「悟道詩」として引用されている。『鶴林玉露』は特に禅詩として引用するわけではなく、「道」と「人」との関係性を述べる言説として、孔子や孟子の言と併記している。だが、「尼」や「悟」といった言い方には、当時すでに禅の精神を表すものとして享受されていた可能性が窺われる。

南宋の禅僧、蘭谿の語録では「古人風月」とされる。この語録をそ

のまま鶉呑みにすれば、蘭谿が生きた南宋時代において、「古人」つまりそれ以前の人の、「風月」つまり詩文として存在していたことになる。さらに、南宋の『懷古録』にはまた異なる詩句で、禪の悟りとは関係ない逸話の中で引用されていた。

これらの文字資料の存在に基づけば、南宋以前に存在していた詩句だということになる。唐代のものとする資料もあったが、そこでは集句詩における四句目のみの引用に止まる。作者についても一つはいかにも適当に書けそうな「唐人」であり、また一つには「王建」という具体的な詩人名も挙げられるものの、王建の現存作品には見当たらず、他の資料に一切記録されないというのも不審である。中国のサイトでは「唐無尽蔵尼」とするものもあるが、これは「梅花」から「無尽蔵」、「無尽蔵尼」から唐代の「慧能」へという、連想に連想を重ねて出来上がった妄想であろう。この詩の成立を唐代とするには、資料的な根拠があまりにも薄弱である。

この四句ができてくるのは、北宋以降であろう。²⁴北宋には春をいち早く告げる梅花の美が、漢詩文で盛んに詠まれるようになる。北宋は禪がさらに広く浸透していく時代でもある。「拈華微笑」の公案の成立も、およそ北宋ごろと見られる。北宋には王安石、蘇軾、黃庭堅など、禪宗の影響を強く受けた詩人も現れ、「偈頌の趣²⁵」に富む詩文が創作されるようになる。

本文のバリエーションの豊富さから考えると、音声言語によって創出され、伝播した蓋然性が高いと思われる。初めから文字で創作され、継承されていたら、本文がこれほどまでに流動的であるはずはなく、

作者や詩題までが自由自在に変えられてしまうことはないはずである。『清平山堂話本』のような講談テキスト集に引用されていることも、口承文芸との親和性を窺わせる。²⁶オリジナルの形はもはや不明である。しかし、口承の世界では、音声化された時点の形が常にその時の「オリジナル」である。語られるたびに「オリジナル」が出現する。伝播の過程において、始原の形がどうであったかということは、気にされなかったのではないだろうか。

初めて音声で生み出された時に、すでに禪的な思想を表すものだったのかどうかは分からない。春をいち早く伝える梅花を賞美する北宋以降の流行を背景として、単に春の使者としての梅花に気づいたということが詠じられただけだったのかもしれない。しかし、本当に求めるものは自らの近くにあるというところに、哲学的な要素が感じ取られたのではないだろうか。

北宋以降に顕著になる禪と詩文の世界との融合を背景として、その哲学的要素が、禪における「悟道」の精神と重ね合わされることになり、「悟道」の「詩偈」として伝承されていたのではないだろうか。「尼」という主体については、あえて「尼」が選ばれた理由は分からないが、「誰の」ということを言った方が都合がよいと判断された時に付されたのだろうか。また、「尼」以外にも「戴益」をはじめとして複数の「作者」がいるが、それらはこの四句を「詩」として享受し、収録する意識が強くなったとき、「作者」が求められ、その名が付されることになったと推量される。「偈」には「作者」は必ずしも必要ないが、「詩文」には「作者」がいるのが一般的である。

禪の世界では、北宋以降元代中頃までに、「拈華微笑」が表す悟りの精神を、まだ寒い中で自らほころぶ「梅花」の姿に重ね合わせて賛美する発想が生まれる。そうした発想によって、尼の「春」（悟り）の発見が尼の「笑」みによって示され、尼自身が「梅花」を「拈」じ、その香りによって「春」（悟り）の存在を確認するという、「拈華微笑」を意識した悟道の世界が四句に表されることになった。「拈華微笑」における釈迦の「拈華」と摩訶迦葉の「微笑」という以心伝心の悟道の過程が、尼自身の中で生じたものとして描かれることになった。その時、第三句の「帰来笑拈梅花」という頗る禪的な味わいを持つ表現が生み出されたのではないだろうかと考えられる。

こうして「禪詩」として定着したが、すでに多くの作者と詩題と本文が錯綜した状態で伝播されてきたという経緯と、元来有していた口承的性格とによって、その後も現代に到るまでほとんど無秩序な増殖と拡散を続けてきている。日本で「名詩」としてもはややされてきた戴益「探春詩」、それは増殖した細胞の一片にすぎないのである。²⁷⁾

〔注〕

- (1) 吳承学「無名氏の意味―撲朔迷離的『梅花詩』」（『中国文化』二〇一〇年二期）。本稿はこの吳氏の論文に負うところが大きい。本稿における吳氏の見解に関する引用は、すべてこの論文に基づいている。
- (2) 『蔡襄全集』補遺は未見。Fの引用は吳氏の論文に基づいている。
- (3) 吳洪沢・尹波編『宋人年譜叢刊 蔡襄年譜』（四川大学出版社、二〇〇三年）に拠る。
- (4) 袁枚撰、郭紹虞・羅根沢編『中国古典文学理論批評專著選輯 隨園詩話』（人民文学出版社、一九八二年）。

- (5) 本稿では「鞋」と「鞵」は異体字の關係（「鞋」は「鞋」の本字）と捉え、その違いについては採り上げていない。
- (6) 揖斐高校注『訳注聯珠詩格』（岩波文庫、平成二〇年）「解説」。日本における『聯珠詩格』の受容の状況については、揖斐氏のこの「解説」に裨益されるところが大きい。
- (7) 足立大進編『禪林句集』（岩波文庫、平成二年）田島照久「解説」。
- (8) 『仏典入門事典』（永田文昌堂、平成一三年）の安藤嘉則氏執筆「首楞嚴三昧經」の項目（一四五頁）。
- (9) 施麗瓊「禪理詩趣總関情―以無名氏一首悟道詩為例」（『名作鑑賞／詩詞研究』七四、二〇一二年八月）。
- (10) 岩城秀夫『佛教大学四条センター叢書3 漢詩美の世界』（人文書院、平成九年）。
- (11) 石井修道「拈華微笑の話の成立をめぐる」（『平井俊榮博士古稀記念論集 三論教学と仏教諸思想』春秋社、平成一二年）参照。
- (12) 小田美和子「禪と梅花―『利天下』と『利他』―」（『古田敬一教授頌寿記念 中国学論集』汲古書院、平成九年）。尚、小田氏は論述の中で、『踏遍』は一本に『踏破』に作る」と注している。
- (13) 「大紀天文化網」<https://www.epochimes.com/b5/16/9/21/n8321640.htm> 令和元年一月七日閲覧。
- (14) 「毎日頭条」<https://knews.cc/> 令和元年一月七日閲覧。
- (15) 「七葉佛敎書舎」<http://book853.com/show.aspx?id=319&cid=66&page=10> 令和元年一月七日閲覧。
- (16) 田中良昭「慧能の生涯と思想」（古田紹欽・田中良昭『人物 中国の仏教 慧能』大蔵出版、昭和五七年）、五〇頁。
- (17) 李清「歴代不知姓名名録」（北京図書館出版社、二〇〇四年）。
- (18) 江盈科『雪涛閣詩評』（陳広宏・侯榮川編校『明人詩話要籍彙編』復旦大学出版社、二〇一七年）第六冊「詩評卷三」所収。
- (19) 趙吉士撰、朱太忙標点『文学筆記叢書 寄園寄所寄』（大達図書供応社、一九三五年）。
- (20) 趙翼撰、霍松林・胡主佑校点『中国古典文学理論批評專著選輯 甌北』

詩話』（人民出版社、一九六三年）。

(21) 汴東波「読稀見漢籍『唐宋千家聯珠詩格』札記」（『古籍研究』二〇〇六・巻下、二〇〇六年二月）。

(22) 陳模撰、鄭必俊校注『懷古錄』（中華書局、一九九三年）。

(23) 前掲注(21)。

(24) 呉氏は、作者は「南宋人」の可能性が高いとしている。

(25) 范月嬌「読黄山谷禪詩」（『密教文化』一五一号、昭和六〇年九月）

(26) 大陸、日本、朝鮮半島には、古代から近現代にかけて、処刑される知識人の最期を語る五言絶句の「臨刑詩」が複数遺されている。それらの「臨刑詩」にも、詩型と構成と表現に極めて高い類型性を持ちつつ、詩句に若干の相違が生じているという、「尋春不見春」の七言絶句と共通した性格が確認され、さらに「臨刑詩」が講談を集成した『水滸伝』に引用されるのも共通点である。「臨刑詩」は、一度創出された「決まり文句」としての「臨刑詩」が、知識人の死を語る口承文芸の中で繰り返し用いられ、再生産されたと推定され、極めて高い口承の性格を有するものであると考えられる。「尋春不見春」詩偈にも、口承世界における発生と再生産という、「臨刑詩」と似た状況を想定してよいのではないかと思われる。「臨刑詩」については、拙稿「伝承される『臨刑詩』―稗史の想像力―」（『東京医科歯科大学教養部研究紀要』四七号、平成二九年三月）参照。

(27) 懐風藻の現存本文の中で、群書類従所収の本文のみが、亡名氏「歎老詩」をその巻末に掲載している。拙稿「群書類従懐風藻の後代竄入詩―亡名氏『歎老詩』考―」（『京都語文』二七号、令和元年一月）において、亡名氏「歎老詩」が、天和版本の欠字欠文を恣意的に補って、元禄一三年に編集された「白雲書庫本懐風藻」に書き付けられたものであり、元来は「蓋翁双鬢霜 春日不須消 笑拈梅花坐 戲嬉似少年」の四句だったが、後に「春日不須消」を「伶俜須自怜」に変え、「山水元無主 死生亦有天 心為錦綉美 身要布裘纏 城隍雖阻絶 寒月照無辺」の六句を付け加え、寒山詩的歎老の世界を描く五言一〇句に創り変えられた作品であることを論じた。本稿には、その三句目

に置かれる「笑拈梅花坐」の句の成立に「笑拈梅花嗅」が関わる可能性を視野に入れ、「笑拈梅花嗅」を含む七言絶句の流伝状況に関する考察を通して、その伝承的性格を明らかにしようという意図がある。山岸徳平「『拈華微笑』と『笑拈梅花』」（『山岸徳平著作集 日本漢文学研究』有精堂、昭和四七年）において、亡名氏「歎老詩」の「笑拈梅花坐」句が禪宗の公案「拈華微笑」との関わりを持って成立する可能性が指摘されている。しかし、「拈華微笑」で「拈」じられるのは「蓮華」であり、「梅花」ではない。また「笑拈梅花坐」では「笑」つた後に「拈梅花」の行為がなされるのに対して、「拈華微笑」では釈迦が「拈華」した後に摩訶迦葉が「破顔微笑」するのであり、「拈」と「笑」の順序が逆である。「笑拈梅花坐」の成立に「拈華微笑」が関係しているのは間違いないだろうが、直接的な影響関係を考えるにはやや飛躍があるように思われる。「尋春不見春」の七言絶句は口承の性格を有しており、禪の悟りの境地を表す詩偈として流伝したと見られ、その過程で示される形の一つに「笑拈梅花」という形をとるものがある。このことは、懐風藻竄入詩句の創作に関わった人物の知的基盤を示唆するものと言える。

〔付記〕

本稿は、科研費基盤研究C「勅撰三集を中心とした日本漢詩文に関する文献学的研究」（一九K〇三四二）、および「懐風藻の注解に基づく上代日本の文筆活動の研究」（一九K〇〇三三二）の助成を受けて行った研究の成果の一部である。尚、呉承学「無名氏の意味―撲朔迷離的『梅花詩』」（『中国文化』二〇一〇年二期）の存在については、楽曲氏の教示を得た。また、曾鳳儀『首楞嚴経宗通』の理解にあたっては、齊藤隆信氏から教示を受けた。

（と） （こ） 日本文学科

二〇一九年十一月十四日受理